

## 喉頭肉芽腫の治療中に発症した喉頭結核の一例

森部桂史<sup>1)</sup> 村上信五<sup>2)</sup>

1) 成田記念病院

2) 名古屋市立大学 耳鼻咽喉・頭頸部外科

耳鼻咽喉科領域における結核疾患は、頸部リンパ節結核が90%以上と最も多く、次いで咽頭喉頭結核と続く。咽頭喉頭結核では、全例に活動性肺結核を併発もしくは続発すると報告されている。結核は結核予防法や薬物治療の発達により、大幅に減少していた疾患であるが、近年の高齢化などにより患者数の再増加の恐れが強まっている。今回、我々は胃食道逆流症による喉頭肉芽腫として、前医にてプロトンポンプインヒビター（PPI）と吸入ステロイド治療を受けたが改善せず、当院で喉頭結核と診断し、その治療中に喉頭肉芽腫の増大を来たしたため、外科的治療を行なった一例を経験した。

症例：35歳女性 既往歴：特記事項なし 現病歴：平成23年2月から嗄声と咳嗽を自覚し、他院耳鼻咽喉科にて喉頭肉芽腫と診断され、PPIとステロイドの併用内服治療を開始された。その後も症状改善を認めず、同年7月当院紹介初診となった。初診時両側声帯周囲は白色変化していた。喀痰の抗酸菌塗抹検査・結核菌PCR検査ともに陰性であったが、結核菌培養（MGIT法）で結核菌が同定されたため肺結核、喉頭結核との診断に至った。isoniazid, rifampicin, ethambutol内服開始し、11月までに咳嗽と疼痛は軽快したが、両側声帯に腫瘍形成を認めた。11月に感冒罹患後より徐々に呼吸苦が出現し、両側声帯腫瘍の増大を認めた。12月に局所麻酔下に気管切開を行い、全身麻酔にて直達喉頭鏡下に両側声帯腫瘍切除を行なった。病理組織診で、両側声帯腫瘍には肉芽腫形成を認めず、喉頭肉芽腫との結果であった。

2012年2月、術後2ヶ月経過し再発を認めていない。喉頭結核は診断に時間を要してしまうことがあり、咳嗽により結核菌が飛散することが問題になる。診断医が喉頭結核を疑い、諸検査を施行した場合は80%が1ヶ月以内に診断されていたという。漫然とPPIと吸入ステロイドを継続することには注意が必要であると考えられた。